重症児研究と生理指標

先日の教育ＴＶ（「あなたと話したい－脳障害児と向き合う医療・教育最前線－」）を、昔を思い出しながら見た。

重症児の療育、教育に生理指標の導入は、出入りしてくれた元学生（現在は国立大学Ｋ教授）と一緒に、35 年程前に試行したのが最初でした。閉鎖された結核病棟の一室を、木の枠組みに銅線網を貼ったシールド代わりの脳波室で、取り組んだものです。今となれば、あんな安易なものでシールドになると思っていたのですね。

このＫ教授は、今はこの研究分野の先駆者であり、第一人者。Ｋ教授とは、今もメル友としておつき合いいただいている。番組の中で、解説、説明していた障害児教育のＩ教授は、Ｋ教授の指導を受けた後輩。あの頃の試行から、番組内容のように発展、展開しているのは、何とも感慨深いものであった。こうして後輩が、この研究分野をそれぞれの立場で追求してくれていることは、嬉しい限りです。

この研究分野の流れを汲む、出入りした元学生でもあるＳ教授とは、リタイヤ後も毎週一度、生理指標を手がかりとしてケースに共に取り組んでいる。教授の側で、35 年前の僕自身のやり残しに向き合い、指導を仰いでいる。Ｓ教授は、その著書に、私達の昭和 47 年の学会報告が「臨床脳波研究を除き、重症児研究に生理指標も取り入れようとした、筆者の知る限り、最初であろう」、また、「重症児に対する聴力検査の方法論を得ただけでなく、行動水準の反応を重視したこと等が、その後の定位反射研究にひとつの方向性を与えている」と記載してくれている。　今から振り返れば、僕も凄いことに取り組んでいたのですね。いつからか、僕は研究でなく実践に重点を置き、生々しいことに興味が移ってしまいましたがね。やはり、僕は現場の人間でしたしね。

妄想をお許しいただければ、係わり手の感性の水準レベルを見られる生理指標ってないのかなあ。

養護学校義務制、介護保険、支援費制度等の絡みで、福祉に係わる人は先の時代より驚異的に増していますが、どうも福祉の似非プロが多くて……。「福祉に、また、障害児教育に携わるなよ！」といいたい輩も少なくない現状……。真に障害児や家族に、寄り添い係わり合い続けてくれる人かどうか、その人の感性を見られる生理指標があればねえ。

こんな妄想を抱くことが、生々しいことに興味が移ったということかな。

（2003 年 05 月 18 日 記）